

翻刻解題
市島春城「自叙伝材料録 一二」

藤原 秀之

前回（本誌六四号）に引き続き、市島春城「自叙伝材料録」を紹介する。今回は全五冊のうち、第二冊（以下、本冊とする）について全文の翻刻に簡単な解題を添えたい。本冊は「余の政治方面」と題され、外題により一九一八年三月中旬から書きはじめたことがわかるが、続く第三冊を同月十五日に起筆していることから単純に連続して執筆したと考えれば、わずかに四、五日で書き上げたことになる。文章を書く際には「一氣ニ書きおろして加筆せず稿を脱する」（本冊第四丁表、以下4オのように表記する）習慣を若いころに身につけていた春城だからこそ、なせる速筆と言えるかもしれない。

それでは最初に書誌的概要をまとめ、その後内容について概観することとする。

「自叙伝材料録」第二冊

資料全体の書誌については第一冊の紹介時に述べたので、ここでは第二冊についてのみ記すこととする。

〈表紙〉左端に外題「自叙伝材料録 二」、右端に「大正七年三月中流起筆」と墨書。さらに右端墨書の左下部に早稲田大学図書館の請求記号ラベルが貼付されている。

『早稲田大学図書館紀要』第六十五号（二〇一八年三月）

〈丁 数〉四九丁。ただし三一―四四、四七―四九丁は白紙。

表紙に「政治方面」とあるが、内容を見てゆくと政治活動を志した少年期から青年期、さらには立憲改進党が結党された頃の話題が中心となっていることがわかる。春城の政治活動については、のちに刊行された随筆の中でも述べられており、また晩年にまとめた自伝である「春城八十年の覚書」⁽²⁾に若干の記載があるが、今日まとまって残っている春城の日誌や筆録が主として一八八六年（明治十九）以降のものであることから、それ以前の内容を含む本冊は、春城の政治活動、思想の成立過程を考える上でも重要である。⁽⁴⁾

具体的な内容は翻刻をご覧いただくこととし、ここでは主要な論点についていくつか紹介することとする。

〈政治活動のきっかけ―新聞人との出会い〉

「何人も力次第にて風雲ニ乗すれば頭要の地位ニ立ち得」る時代であり「血気の者の政治ニ志すハ自然の勢」^(1オ)であったことから、春城自身も政治に強い関心を持ち、自身がどのように関与してゆくかについて「青年時代より新聞記者の地位を羨」⁽³⁾んでいたこともあり、冒頭からの五丁は青年期までの新聞との関係述べている。そして「新聞ニ触れたるの始り」として新潟学校時代、すなわち春城がわずか十三、四歳ころに数行の翻訳文が地元紙に掲載されたことをあげている。

その後、東京大学に進学し、多くの新聞人と出会い、自らも学内の演説会での活動を通じて弁論術、執筆の力を向上させてゆく。

在学中の新聞とのかかわりで言えば、「此頃帰国して新潟の親戚の家ニ滞在中、無聊なるま、試みニ一文を草して当

時尾崎行雄を主筆とせる新潟新聞ニ寄せ、出るか否やを試みしに、翌朝の寄書欄に立派ニ載せあるを見て、内心甚た愉快を覚えしことあり（たしか虎烈刺病の予防注意と云ふことき論文にて雅号にて出したりと覚ふ）（3オ）との記述が注目されよう。尾崎が『新潟新聞』の主筆を務めていたのは一八七九年（明治十二）から約二年間のことであり、その間に春城は一八八〇年の夏から秋にかけて帰郷している。そこで該当期間の『新潟新聞』を確認すると、一八八〇年（明治十三）八月三十一日（二〇一〇号）の「寄書」欄に「虎影一年期之詞」と題する一文が、「桃浪老人」の筆名で掲載されていることがわかる。「今や炎帝將二大ニ権を握り、（中略）昨年虎影跋扈ノ期や至レリ」との文章ではじまり「虎影」、すなわち前年大流行したコレラがこの年はそれほどでもないという現実を踏まえつつも油断を戒める内容となっており、「虎烈刺病の予防注意」について書かれたものと言つてよいだろう。一方、春城が遺した資料の中に、一八八〇年のものとして「桃浪記游」⁽⁶⁾と題する一文がある。これは「明治十三年の夏、東なる都より故郷に帰らんとて上州松井田の駅を過ぎ」との文章ではじまる妙義山登山の紀行文（白雪山に登るの記）にはじまり、その後数年の紀行文をまとめたもので、現存する数少ない青年期の筆録である。さらに一八八八年（明治二二）から翌年にかけての日誌には「桃浪書院日録」⁽⁷⁾の標題を付していることから、当時春城が「桃浪」の号を用いていたことはあきらかである。ここから、『新潟新聞』に掲載された「虎影一年期之詞」の筆者「桃浪老人」は春城その人のことだと考えられ、少年期の新聞掲載は翻訳であり、「新聞生活の発端とは言ひ難」^(2オ)いと述べていることから、あるいは春城の新聞デビューの一文と言うこともできよう。

〈東京大学時代の演説会〉

東京大学時代の「演説会」についても本冊で詳述している。⁽⁸⁾ 学生たちがいくつかの団体を結成し、それぞれに演説

会を開催していたことについては春城も随筆で述べているが、本冊では春城が所属した共話会をはじめとした三団体について、その成立と分裂、相互の關係について具体的な名前をあげて紹介している。詳細は翻刻を参照していただくこととし、ここでは高田早苗や坪内逍遙が所属した晩成会について、高田の指摘と比較してみてゆくこととする。

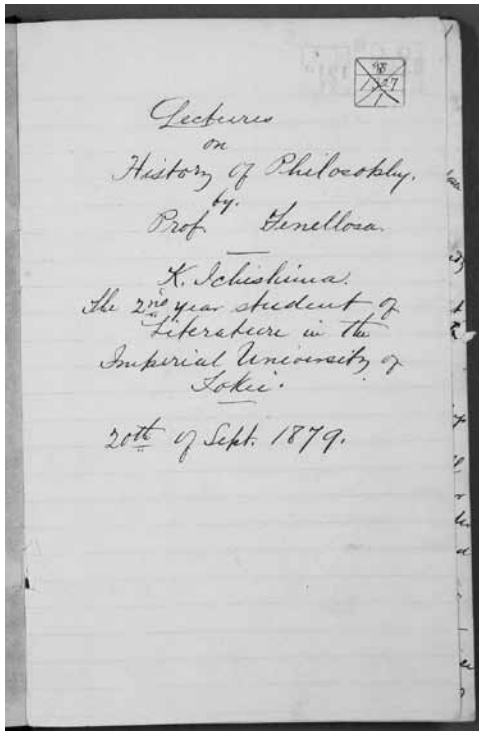
春城は晩成会と共話会の關係について「初め開成学校に入つた頃、寮舎が異つて居つた關係から別ニ会が出来た訳で、格別深い意味のあつた訳でハな」(7ウ)く、しばらくすると「晩翠会の一角と共話会の一角とか追々接近して堅く結ぶ様になつた、即ち高田外二三子と我等の結托である、実ハ性格の近かきより此關係も生じたのだが、一ハ又地方關係もある、」(9オ)として、自身と高田たちとの接近の理由が共通する「関東氣質」にあつたとしている。

一方で高田は自身が所属した演説会の設立について以下のように述べている。「共話会、戊寅社などといふ団体は、演説の稽古を第一的とするにもせよ、其処に自ら一つの学生間の党派の形を為して、其会員が一同となつて他に対する様になつたのである。そこで、私も何時迄も孤立の状態に在る事も出来ない。と言つて、憶病者の癖に負惜みが強かつたと見え、人の拵へた会へ後からお叩頭をして入る氣にもなれなかつた。とう／＼終ひには、他の団体から打洩らされたか、選り洩らされたかした同級生を糾合して、矢張り演説を目的とする一つの会を別に組織し、之れを晩成会と名けた。是は文字の示す如く、所謂大器晩成の意味で、後から出来ても今に一番大きい会になるといふ、抱負といふよりも、寧ろ瘦我慢を其名で現はした様なものであつた。此晩成会会員中には、第一に坪内逍遙君、それから現貴族院議員石渡敏一君、前早大教授天野為之君などいふ人も這入つて居た」⁽¹⁾と、春城の説明とは若干異なっている。いずれにしても両者が接近したことにより「高田の仲介で小野東洋ニ交はり、終ニ大隈参議ニ謁して、改進黨と云ふ非政府党の組織を策した其の根本の先素が多く共話会側ニあつたことを考へると、書生の同窓会もなか／＼天下の大勢ニ關係か無いとハ謂はれぬ、」(10オ)と演説会の活動が後の政党結成にまでつながっていったと春城は述べている。

さらに春城は別のところでは「若し小野先生と交はらかつたなら大隈侯とは他人であつたかも知れん。東京専門学校も或は起こらなかつたかも知れ」ず、「結果として私の如きは、侯に附随して四十年の長きどんな高等教育も及ばぬ大なる薰陶を受け」たと述べており、だとすれば演説会を通じた人脈形成が、春城の人生を決定したと言ってもよいかもしれない。

〈フェノロサの影響〉

春城の学生時代で忘れてはならない人物がアーネスト・フェノロサである。⁽¹³⁾東京美術学校創設にかかわるなど、その存在は日本美術史の中で語られることが多いが、そもそも一八七八年（明治十二）に東京大学に政治学などの教師として来日したところからフェノロサの日本での生活は始まっており、その講義内容の一部が、春城資料の中に筆記録として残されている。⁽¹⁴⁾（図版1）フェノロサは政治学のほか、哲学、理財学の教鞭をとっており、その影響に



図版1 市島春城筆「フェノロサ哲学講義」
標題（春城資料. 698）

ついで春城は、「われ／＼に尤も大切な課目を教へた教師ハフエネロサで、」「自分其他の同志に大なる薰陶を与へたニ相違ない」(9ウ)とまで言い切っている。春城自身への直接の影響としては、彼がまとめた「政党論」は「大学ニ於てフエネロサの講義やウールシーの政治学などを参酌して書いた」(6ウ)ものであったという⁽¹⁵⁾。また立憲改進黨創設にあたつては、「改進黨の主義綱領も実はフエネロサの講義より生じ、政府から反謀学校を以つて目された早稲田大学の前身、東京専門学校なる政治学校の教授も皆な此教師の生んだものであることを想ふと、実ハ意外の処へ飛火のしたものだ」であり、「鷗渡会ニ於て政党の樹立を策するにつき、当時高田や自分共のときフエネロサの門人の腹笥とも云ふべきハ其の講義筆記より外ニ無かつた、フエ氏の哲学講義ニ人生の目的を幸福を得るに在り、而も其の目的を達するには手段を獲らざるを得ぬ、と云ふこととき一節が、新生党の宣言の骨子として小野君ニ取られた、小野君ハ宣言書を稿するに余程苦心されたが、初稿は全然われ／＼の提出した講義筆記のある緊要の部分の反訳した様なものであつた、それを幾回も幾回も稿を改めて、漸く痕跡を没する様になつたが、精神ハ変して居らぬ、而してこれか立党の時ニ発表され、且つ長く改進黨の宣言となつたのであると思ふと寧ろ意外の感ニ打たれざるを得ないが、それか實際である、」と、春城だけでなく周囲の人々に対しても絶大な影響があつたと語っている。

〈鷗渡会と立憲改進黨の結党〉

一八八一年(明治十四)、高田早苗を通じて小野梓を知つた春城は、高田や小川為次郎らとともに小野の家に集まり、新政党樹立の準備を進めてゆく。それは「非藩閥党たる点ニ於てハ自由党と同様であるが、仏蘭西の政党の反訳のことき、イザと云へバ政体までも変更せんとする、自由を得ん為めには手段を問ハぬと云ふこととき危険なる政党を排し、秩序的進歩を企図する政党の樹立を策した」もので、「藩閥政府から見ると、謀叛人も同様」(13オ)であつたため、

政治的な集会と思わせないように会の名称にも工夫する必要があった。「鷗渡会」の誕生である。ここで春城たちは「立憲改進黨」結党に向け、前述のようにフェノロサの講義筆記を小野に提供する一方、「小野君か当時著作中であつた国憲汎論のあらすじなどを聞かされた、小野君ハ土佐の人で弁舌に威嚴があつた、坐上の談論でも懦夫を起たしむるの概かあつたので、皆く小野君の演説に倣はんとした、ある時ハ小野君を聴者として、各々演説を試み、その批評を聴たこともあつた、兎三角政治行動の門出に小野君より種々大切な政治教育を受けたことハ確かである」と、小野から政治活動を進めてゆくうえで必要な多くのことを学んでゆく。そして「明治十四年の政変」により大隈が下野すると小野も会計検査院の職を辞し、いよいよ立憲改進黨結党へと進むわけだが、このとき鷗渡会の面々は、大隈を総理とし「小野君を擁して吾々が其の中堅となる意氣であつたが」、実際には「報知、毎日の連中ニ花を持たせねバ治まらぬ様になつて」いたため、「蔭の身となり小野君の帷幕ニ參する丈の事で、甚だ物足らぬ氣がした」という。これは立憲改進黨を支える三つの勢力、すなわち矢野龍溪、尾崎行雄、藤田茂吉ら『郵便報知新聞』を中心に論を展開する慶應義塾系の東洋議政会の面々、沼間守一、島田三郎ら『東京横浜新聞』に論陣を張る嚶鳴社の人びと、そして春城ら鷗渡会という三つの勢力のうち、「報知派、毎日派の面々ハ既ニ政治的経歴を有して居るから、之れに譲るも纏まりの爲め已むを得無」いとの判断によるものであつた。たしかに新聞紙上でそれぞれ自論を展開していた二つのグループに対し、鷗渡会の面々は、個人では新聞への投稿、編著書の刊行をしている者もいたが、組織としてまとまつた情報発信はできておらず、「蔭の身」となるもやむを得なかつたのであろう。そうした状況ではあつたが、その中で鷗渡会の面々が中心になつて進めた事案が、東京専門学校創立と機関紙『内外政事情』⁽¹⁷⁾の発行の二つである。春城はそのどちらにも関与し、特に機関紙発行については山田一郎とともに中心となつて進めたが、「基礎が薄弱であつたために半歳も持続することが出来なかつた」(16オ)。「内外政事情」は、もともと服部誠一⁽¹⁷⁾が刊行していた『江

湖新報』を改題し、服部と春城らが共同で刊行したものであったので、両者の見解の違いもあって刊行を続けられなくなつた経緯が本冊に記されている。

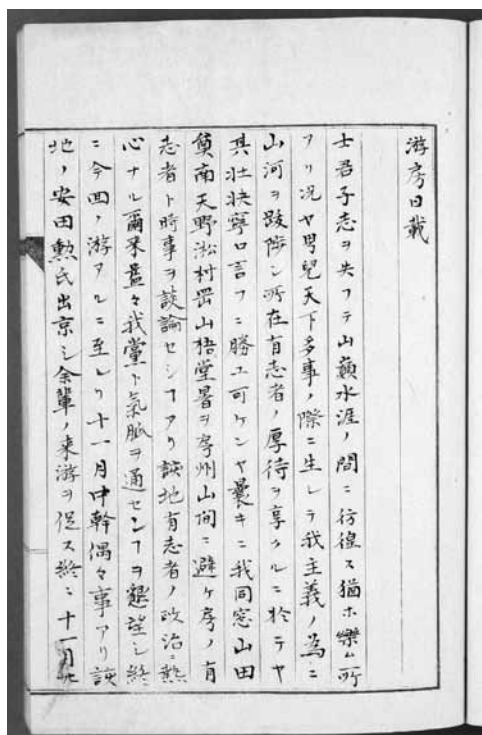
〈三菱時代のことゝ小野への不義理と和解（房州行）〉

東京大学を退学した春城は、鷗渡会の同志である小川為次郎や小野梓の義兄の小野義真が三菱会社に関係していたことから、小野梓に「いくらか口を利て貰つて」同社の「会計部」に入社するが、「一年も経たぬ内に自分から辞し去つた」(17ウ)という。今日残された辞令によれば春城が三菱会社に会計方として入社したのが一八八二年(明治十五)三月十日、退職は同年七月十一日⁽¹⁸⁾で、「一年も経たぬ内に」と言っているが、それどころかわずか四ヶ月の在職だった。本冊の中で春城は三菱での勤務について「会社ハ実ニ一王国とも云ふべきもので、朝ハ早きを競ふて出社し、夜ハ幾んど毎晩社員同士の宴会あり、幾んど新聞すら読む違もなかつた、況して政治などにたづさハるべき余地も無く、亦会社も之れを許さなかつた、当時の自分は政治以外ニ趣味とてハ無く、これと違さかることか何寄りもつら」(17ウ)かつた、と述べ、社内からの引止めもあつたにもかかわらず、「それにも耳を藉さず、一散ニ飛び出したのは三菱ニ不満のあつた訳でハ無く、政治ニたづさハることが面白かつたから」(18オ)だという。三菱退社の直後、七月十五日に正式に立憲改進黨の黨員名簿にその名を記載されて⁽¹⁹⁾おり、「政治上の大切な事」(18オ)とは、まさにこのことであつたのだろう。小野梓の日記「留客斎日記」を見ると、退職の四日前にあたる七月七日条に「市島来訪、談其身上之事」⁽²⁰⁾とあるので、あるいはこの訪問時に春城は退職の意志を伝えたのかもしれない。ただ就職を斡旋した小野にしてみれば、わずか四ヶ月での退職というのは納得がいかなかったよう⁽²¹⁾で、「感情を害し」(18オ)たのも無理はなからう。春城は思いを込めた長文の書簡を記すことでなんとか小野の怒りを鎮めることができたようだが、春城の訪問にも最初は会お

うとしないことがあったという。そしてそんな二人の「中直り」(18ウ)の場となったのが、房州への遊説であった。

この地方遊説は一八八二年(明治十五)十一月二〇日から二五日にかけて、小野が春城、砂川雄峻⁽²¹⁾とともに千葉県勝山から鴨川、小湊周辺で地元県会議員らの協力を得ておこなったもので、この時のことを小野はその日記に詳述するとともに、別に「游房紀行」という一文にまとめ、立憲改進黨の機関誌『内外政事情』一二—三三三号(一八八二年十二月二七日—一八八三年一月三日)の中で六回に分けて掲載している⁽²²⁾。春城もまた「游房日載」と題して記録を残しており、(図版2)どちらも「中直り」については一切言及していないが、遊説の行程とその内容を詳細に述べ、創立間もない立憲改進黨にとって、党勢拡大のためにこうした地方遊説がいかに重要であったかがわかる。特に春城にとつては「処女演説」(18ウ)とあるように立憲改進黨入党直後の演説会は特別な意味を持っていたと考えられる。

小野と春城、それぞれの立場で遊説旅行の記録を残しているわけだが、両者の文章を比較すると、多くの点で記述が一致していることに気づく⁽²⁴⁾。もちろん同じ経験を語っているわけで、全



図版2 市島春城「桃浪記游 一」のうち
「游房日載」、(春城資料. 1)

体の内容が一致するのは当然だが、それ以上に文章そのものが一致している部分が多数見受けられる。両者の内容を確認すると、小野の「游房紀行」は冒頭で房州行の目的を「余が政事上の意想を吐き、房州政治上の意想を探る」とにあるとし、続けて出発当日、十一月二〇日からの様子を時系列に、どこに誰と行き、何をしたかという事実関係を中心に記している。ただ記述は行程の途中である二三日の午後「舟路前原に還る、時に午後二時なり」の一文で終わっている。一方春城の「游房日載」は、かつて友人たちと房州を旅した思い出から筆を興し、そのまま十一月二〇日の旅立ちへと進めている。そこからは小野の記述とほぼ一致した内容（多くの部分では文章も）となっており、さらに小野が筆を止めている「時に午後二時なり」の後も帰京まで文章が続いている。だとすると、房州行全体に渉る春城の文章がもととなり、小野の筆録はその抄録かとも思えるが実際にはそう簡単ではない。この時期の『留客斎日記』を見ると、小野は帰京翌日の十一月二六日に「作游房日記」と記しており、千葉から戻ってすぐに紀行文を著していることがわかる。一方春城の「游房日載」は、末尾に「京ニ帰ル、実三十六年十一月廿六日也」と記されているが、小野の日記からこの遊説が一八八二年（明治十五）十一月におこなわれ、帰京が同月二五日なのは明らかであり、春城の記述は年と日付が事実と異なっていることになる。「游房日載」が収められている「桃浪記游」は前述のように三冊からなる紀行文集であり、三冊の装訂、料紙は共通しており、墨色や筆致もおおむね同様で、それぞれの旅の直後ではなく、後日あらためてある程度まとめて書かれたものと思われる。だとすると遊説直後に記された小野の「游房紀行」が先に成立したことになり、春城はそれを参考にしたと考えるのがよさそうである。春城は小野の没後、遺稿出版を担当していた時期があったという。⁽²⁵⁾このとき春城は小野の「草稿の中に起臥し」「あらゆる遺稿を自分の書斎に置き、一二ヶ月間は繚読に時を費し、其の中には幾回もくも繚読したものがある⁽²⁶⁾」たというから、その際に「游房紀行」についても目にし、あるいは筆写するなどして手元に残して置いたものかもしれない。小野の没後、その日

記「留客斎日記」に触れたことが、春城が日誌を継続的に付け始めるきっかけになったことを思えば、小野の存在がのちに随筆家としても名をなす春城の基礎を作ったと言えるかもしれないが、紙幅の制限もあるので、ここではさらなる言及は避け、詳細は別稿を用意することとしたい。

〈高田新聞時代〉

政治活動を本格化させた春城に新たな転機が訪れる。『高田新聞』の創刊である。自由民権運動が激しさを増す中で政府の弾圧もまた一層厳しいものとなり、福島事件、加波山事件といった大弾圧事件がおこったが、春城の郷里新潟で起きた高田事件もそうした自由民権運動、とりわけ自由黨員に対する弾圧事件として知られている。⁽²⁸⁾一八八三年（明治十六）三月一〇日、北陸四県（福井、富山、石川、新潟）の自由党有志四〇〇余名の会合が富山県の高岡で開催され、直後の三月二〇日に新潟県の頸城自由黨員二〇数名が「大臣暗殺内乱陰謀」の嫌疑で逮捕された。新潟県内の他の自由黨員にも逮捕者は広がり、最終的には三〇名以上にのぼったが、春城はこれを「此頃の政府は自由党を忌むこと蛇蝎の如くであつて、動もすれば杯中の蛇影にも驚いた位なことであるから、高田の自由党中、穏かならぬ挙動があつたと云ふので、直ちに福島事件の二舞をする者かの如く重大視し」（18ウ）ためだとしている。こうした状況のもと、前年成立していた上越立憲改進黨が弾圧に対抗し、自らの考えを発信する場として新聞の発行を計画、主筆は東京の立憲改進黨からを迎えようということになり、春城が郷里に帰って担当することとなった。『内外政事情』で新聞製作にかかわっていたとはいえ、「創業年代の新聞を主宰するには自分も甚だ覚束ないものであつた」（19ウ）が、地元の中川源造、竹村良貞らと協力し発刊に至った。「創刊勿々主題ハ高田事件であつたことハ言ふ迄も無かつた、此事件ハ自分等の反対党の嫌疑事件であるが、藩閥政府を敵とする点ニ於てハ反対党も同様である所から、此意味ニ於

て高田の自由党ニ同情を寄せた、当時越後にはいまだ自由党ニ属する機関新聞ハ一も無つた所から、新たニ生れた反対党の新聞が好意的態度を示したと云ふので、越後全国の自由党の好感を博し」(20才)たという。ただ、そうした立場からの論説は政府の反発をかうこととなり、時あたかも新聞紙条例は「峻烈の改正を施し」ており、社長であつた春城も処罰の対象となりうる状況となつていた。「檢察官ハ常ニ敵意を以つて新聞紙や政客を見たものであるから、苟くも羅織して罪となし得ることハ細微漏さず罪の材料としたから溜まらない、高田事件ニ対し、警察署長が取調をなすに当り、其の無学を暴露した一笑話を滑稽の談として掲げたのが直ちに官吏侮辱罪として起訴され、且つそれか罪となり」投獄されることとなつた。この「一笑話」について春城は随筆で、警察署長赤木某が取調べにあたり、「戈」という字と「才」が似ているので「干戈と云ふべきを干才と云つたのがをかしいと書いたばかりで、それが官吏侮辱となつた」⁽³⁰⁾と述べている。ただ実際にはその点が問題視されたのではなく、檢察官である堀小太郎検事補の取調べ方法について記述した部分が侮辱にあたるとされたとの指摘がある⁽³¹⁾。最終的に一八八四年(明治十七)六月十二日の大審院判決で春城の有罪が確定し、同年六月二一日に高田監獄支所に収容され、翌年二月十三日出獄するまで八ヶ月の獄中生活を送ることになる⁽³²⁾。春城は高田の監獄からまもなく新潟に移され、そこに前述の赤木署長が副典獄として着任し、彼による「復讐的の腹愈せを為さん陰険の所置」があつたことや、長野の監獄に移つてからは同じ越後人の知事であつたことが幸いし、監獄に関する論考までまとめることができるほどに厚遇されたことが綴られている。こうした内容は春城の随筆「獄窓旧夢談」にも詳細かつ軽妙な筆致で記されている。

〈総括〉

獄中での生活を本冊三〇丁表で締めくくつた後、三〇丁裏から四四丁まで十四丁の白紙を挿んで、最後に春城は自

身の政治生活を「失敗に帰した」(45オ)と総括している。「失敗の大原因は始終失意の位置ニ立たれた大隈侯の旗下ニ属した」ことだとしつつも、自身の行動に限ってみれば「中央に居らず地方ニ出かけたこと」が失敗の要因だったとしている。³³⁾さらに自身の政治家としての素質について分析し、欠点を挙げ、「混濁なる政海を泳くには自分は余り潔癖か過ぎた様に思ふ、自分か今少しく悪であつたら、人を排擠しても頭を擡げ得たであらう、自分ハ意気を本位としたから、周到の用意か足らなかつた」とし、「若し今少しく用心かあらば」監獄に入ることも、選挙で被選挙権を問題視され失格となることもなかつたのではないかと、後悔ともとれる言葉を述べながらも、最終的には「失敗は寧ろ必至の結果であ」つたと現状を受け入れようとしている(45ウ)。そして「自分は財産趣味よりも矢張政治趣味を選む者」であり、「教育事業など身を寄せれば、働く丈の甲斐もある」からこそ早稲田大学に「立籠つた」のだと、政治活動から身を引いた後の日々について述べ、「年壮者流の道楽として」の政治が楽しめるのも「一たび政治ニ与り、一たび議政堂に上つ」たからこそ「時事ニ隻眼を有する」ことができるとしているが、それらの言葉は、健康上の理由からとはいえ政治活動を道半ばであきらめなくてはならなかつた春城が、政治家となくなつても政治と関わる方法があると自身に言い聞かせているように思える。本冊が衆議院議員時代や、その後大隈重信の後援会長として臨んだ選挙戦などに触れず、本来そうしたことを書くべき部分(本冊の三〇丁裏以後)が白紙となっているのは、政治活動に未来を見出していた若き日を思い、その時代だけを書こうと考えたからかもしれない。

以上、「自叙伝材料録 一二」の主な内容を関連資料とともに紹介してきた。冒頭にも述べたように春城の政治活動については随筆などでも触れられてはいるが、本冊によって政治とかわりを持つようになった時期の具体的な行動を確認することができた。図書館人、大学人としての市島春城ではなく、政治家・市島春城の自叙伝は、目標に向かっ

て一途に励んでいた若き日の思い出と、その後の挫折、後悔が交じり合った複雑な思いで記されたものであった。

注

- (1) 「自叙伝材料録」全体については拙稿「翻刻解題 市島春城「自叙伝材料録 一」」(『早稲田大学図書館紀要』六四、以下前稿とする) 参照。
- (2) 「郷国に於ける政争時代」『春城代醉録』(中央公論社、一九三三年)、「搖籃時代の議會」『回顧録』(中央公論社、一九四一年)、など。
- (3) 早稲田大学図書館蔵「市島春城資料」七六八。以下、「市島春城資料」は単に「春城資料」とする。また、一九六〇年に早稲田大学図書館により翻刻が刊行されている。
- (4) 春城が意識して日記をつけ始めるのは一八八六年(明治十九)二月のこと、それまでも何度か日記を書いたことはあったが、長続きはしなかった。この前月、一月十一日に小野梓が若くして死去し、その遺稿編纂に着手した春城が遺族から示されたのが小野の日記「留客斎日記」であり、その存在が編集作業を進める上で「大ニ便利ヲ覚ヘ」たという。そしてそのことが、自身も日記を継続して書くようになったきっかけだったと述べている(『菰月蘋風樓日録 首卷』自序、春城資料、五一六。春城はこの後、死去の前年である一九四三年まで、ほぼ途切れることなく日誌と筆録を記し続けることになる)。
- (5) 後掲翻刻注(7)及び、春城日誌研究会「市島謙吉(春城)年譜(稿)」(『早稲田大学図書館紀要』五七、二〇一〇年) 参照。
- (6) 春城資料、一一三。
- (7) 春城資料、五二〇—五二二。
- (8) 春城たちが通った開成学校(東京大学の前身)が東京神田一ツ橋(神田錦町)にあったことから、草創期の東京大学は一橋大学とも称された。市島春城「一ツ橋時代の大学同窓会」(『小精廬雜筆』、ブックダム社、一九三三年)。
- (9) 市島春城「演説思ひ出譚」(『春城談叢』、千歳書房、一九四二年)。
- (10) 本冊では高田らの会を一貫して「晩翠会」としているが、高田自身は後述のように「晩成会」としており、春城も前掲の「演説思ひ出譚」では晩成会としているので、ここでは「晩成会」と表記する。

- (11) 高田早苗「我党の晩成会」「半峰昔ばなし」(早稲田大学出版部、一九二七年)。
- (12) 市島春城「小野梓先生を憶ふ」『文墨余談』(翰墨同好会・南有書院、一九三五年)。
- (13) Fenolosa, Ernest Francisco、一八五三—一九〇八。フェノロサの東京大学での講義内容については、①山口静一編『フェノロサ社会論集』(思文閣出版、二〇〇〇年)、②池上哲司監修・刊『フェノロサ「哲学史」講義 高嶺三吉フェノロサ講義筆記ノート 清沢満之フェノロサ講義自筆ノート』(二〇一三年、続編は村山保史監修・刊、二〇一六年)が詳しい。
- (14) 「フェノロサ哲学講義」一八七九年(春城資料、六九八)。
- (15) 春城の「政党論」執筆については、拙稿「春城市島謙吉、若き日の政治論 翻刻紹介・市島春城「還魂紙料」」(『日本史攷究』四〇、二〇一六年) 参照。
- (16) 小野梓、鷗渡会、立憲改進黨については、大日方純夫「小野梓 未完のプロジェクト」(富山房インターナショナル、二〇一六年) 参照。
- (17) 服部撫松、一八四一—一九〇八。陸奥国二本松藩藩儒の子として生まれ、維新後は開成学校教授となった。一八七六年(明治九)、『東京新誌』を創刊、その後『江湖新報』等政論紙を発刊するが、しばしば発禁となった(ジャパンナレッジ版『国史大辞典』)。
- (18) 「三菱蒸気船会社備辞令」、「三菱蒸気船会社解雇辞令」。いずれも「愧存経歴文書」(春城資料、八九五)に貼り込まれている。また資料名は「市島春城展」報告 付・「愧存経歴文書」目録稿(『ふみくら』四九、一九九五年)によった。
- (19) 「立憲改進黨党員名簿登録証明書」(「愧存経歴文書」のうち)。
- (20) 傍点は原本のママ、早稲田大学大学史編集所編刊『小野梓全集』五、一九八二年、による。
- (21) 一八六〇—一九三三。東京大学卒業後、東京専門学校創設に参加。また鷗渡会の一員として立憲改進黨の結党と党勢拡大に尽力、のち大阪に移り弁護士、大阪府会議員、衆議院議員をつとめた(ジャパンナレッジ版『日本人名大辞典』)。
- (22) 前掲注(20)書解説(中村尚美) 参照。
- (23) 前掲注(一)「桃浪記游」(春城資料、一)に収載。
- (24) 具体的には最初の演説会場である下佐久間村天寧寺について春城は「下佐久間村ハ勝山(三字アキ、原本ノママ)ヲ距ル凡ソ十六七丁、

山丘ニ沿フテ村落ヲ為ス」と述べ、小野は「下佐久間村は勝山を距る凡そ廿余丁、山丘に沿ふて村落を為す」とほぼ一致している。また翌日、常福院での演説会が、途中で警官によって中止させられた部分では、「安田氏先ツ一題ヲ演シ、永井氏、余、及ヒ小野君亦タ一題ヲ演ス、踵テ砂川君ノ演説ニ及ンテ言フ所治安ニ妨害アルヲ鳴ラシ、警官之ヲ中止シ全会ヲ解散ス」と春城が述べているのに対し、小野は「安田氏先づ一題を演じ、永井君、市島君及び余も亦た各々一題を演ず、踵で砂川君の演説に及んで言ふ所治安に妨害あるを鳴らし、警官之を中止し全会を解散す」と、ほぼ同文となっている。

- (25) 実際には春城には『新潟新聞』での仕事が入ったため遺稿編纂は高田早苗が担当し、『東洋遺稿』上下（小野英之助、一八八七年、富山房書店発売）として刊行された。

- (26) 市島春城「小野梓全集序」、『学芸随筆 鯨肝録』（東宛書房、一九三六年）収載。

- (27) 前掲注(2)参照。

- (28) ①永木千代治『新潟県政党史』、同書刊行会、一九三五年、②手塚豊「自由党高田事件裁判小考」（『手塚豊著作集』一（自由民権裁判の研究 上）、慶應通信、一九八二年、初出『法学研究』四六（四、六）、一九七三年）。

- (29) 本冊では「赤津某」としているが、当時の高田警察署長は赤木義彦なので（前掲注(28)②参照）随筆の表記が正しい。それは「赤津」という名がどこから出てきたのか。実は、春城が衆議院議員選挙に出馬した際、第三回総選挙（一八九四年三月）では被選挙資格に問題があるとして失格となっている。春城は決定を不服とし、選挙区長である北蒲原郡長を被告に裁判を起しているが、この北蒲原郡長が「赤津克郎」であり、あるいはこの人物と混同した可能性がある。「衆議院議員選挙資格一件書類」（春城資料 八二二）参照。

- (30) 市島春城「獄窓旧夢談」（『回顧録』、中央公論社、一九四一年）。

- (31) 前掲注(28)②参照。

- (32) 拙稿「解説と解題」（『市島春城随筆集』、クレス出版、一九九六年）。

- (33) 郷里新潟で選挙戦を戦い、早稲田大学の運営にかかわるようになってからも、郷里を中心に地方校友との関係構築を積極的に進めた春城の姿からするとこの発言は意外な感じもする。あるいは議員生活がもっと長く続き、地方出身議員として中央政界での地歩を固めることができていたら、違った感想になったのかもしれない。

翻 刻

〈凡 例〉

- ・文中の旧字（異体字含む）は新字に統一した。「二」については漢字「二」との判別のため半角とした。本文中の（ ）は原本のままである。
- ・文中、あきらかな誤字、当て字には傍注を加え、一部に読点を補った。
- ・加筆、修正、削除部分については最終的な表記のみを記した。
- ・各半丁の区切りはカギ括弧（「」）でくぎり、次丁の字句をその後に追い込みで表記した。また、表裏を（オ）（ウ）で示すこととし、一丁表Ⅱ（1オ）とした。

〈表 紙〉

自叙伝材料録 二

大正七年三月中浣起筆

〈見 返〉

「イ 4 1919 752」（鉛筆書入）

「38—9464」（ナンバリング）

〈本文〉

「176912」(1才右上欄外ナンバリング)

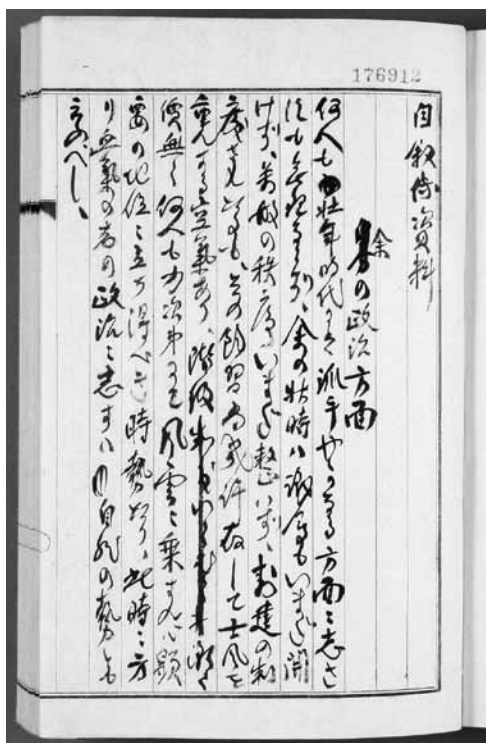
自叙伝資料

(一行アキ)

余の政治方面

何人も壮年時代には派手やかなる方面ニ志さずも無理ならず、余の壮時ハ議會もいまだ開けず、万般の秩序いまだ整はず、封建の制廢されたるも、その余習尚幾許存して、士風を重んずる空氣あり、階級漸く備無く、何人も力次第にて風雲ニ乗すれば頭要の地位ニ立ち得べき時勢なり、此時ニ方り、血氣の者の政治ニ志すハ自然の勢とも云ふべし、」(1才)

余は青年時代より新聞記者の地位を羨みたり、自家の説や文か毎日／＼刊行さるゝことハ如何に愉快なるべきやと操觚



図版3 1才

(図版3)

業を此上なき名譽の者とも思ひ、亦会心のものとも思へり、新潟学校ニ在学時代、当時教頭の位地ニありし梅浦精一^①が翻譯の練習にとて外字新聞の雜報を三行乃至五行上級の学徒ニ課し、それに筆を入れて当時新潟ニ刷行せる某新聞紙（此新聞を近日まで新潟新聞と思ひ居りしが時代ハ新潟新聞刷行前なることを發見したり、何と云ふ新聞紙なりしか、今題名を思ひ起す能はず）ニ登載セしが、自分ハ最上級な（1ウ）らざりしも漢学素養ありて翻譯の能力ありと認められて、ひとり拔擢を受け老輩と共に新聞紙を反訳する中間^{マヤ}組入れられたるが、当時内心これを痛く喜び、自家の訳したるものが新聞紙ニ載りたるを見て真ニ愉快を覚え、又名譽にも思ひたり、これ余か新聞生活の發端とは言ひ難きも、新聞ニ触れたるの始りと云ふを得べし、

東京大学（帝大と称する前、即ち一ツ橋ニ大学のありし頃の名）に在りし頃ハ、新聞記者ニ著名の人多く、当時第一流の人材は皆な新聞を主宰し、且つ自ら筆を執り、互ひに議論の雄を争ひ（2オ）たり、福池^{マヤ地}、沼間^③、末広^④、藤田^⑤、矢野^⑥、等が各新聞社ニ拠り、論陣を張りしハ此頃なり、當時の事情ハ進むて台閣ニ立つ能はずんバ、退て新聞の主筆たれと云ふ塩梅にて、如何にその頃の書生ニ此等第一流の操觚者ハ瞻仰されしか、吾れ等大学の学徒と雖も実ハ羨望已まさりし、各新聞の論説ハ争ふて読まれたる中にも、福池の論文ハ老熟と莊重を以つて殊ニ持離され、亡友山田一郎外二三子の如きハ課業よりも日々の新聞を読むを大切とし、幾んど之れニ没頭したり、此等の空氣ニ自分の鼓吹を受けたるは言ふまでもあらず、」（2ウ）

今より考ふれば、己れの幼稚なりしことを笑ふの外ないが、此頃帰国して新潟の親戚の家ニ滞在中、無聊なるまゝ、試みニ一文を草して当時尾崎行雄を主筆とせる新潟新聞ニ寄せ、出るか否やを試みしに、翌朝の寄書欄に立派ニ載せあるを見て、内心甚だ愉快を覚えしことあり（たしか虎烈刺病の予防注意と云ふことき論文にて雅号にて出したりと覚ふ）又其後、元老院へ官吏学生ニ政談演説を許すべしとの建議をなせし折、^⑧福池ハ不賛成を鳴らしたりと当時同窓にて糊口のため

福池の配下ニ筆を執りたる関直彦の伝ふ」(3才)るを聞き、然らバ福池ニ面会して一論を試みんと此の建議の署名者、岡山、山田(一郎)と余の三名、日報社の楼上ニ関の紹介にて初めて福池ニ面会したることあり、双方の議論ハ終ニ決セさりしが、実ハ平素福池の文章ニ感服し居る自分のこときハ初めて福池ニ接したるを以つて内々名譽ニ感したる程なりし、釋の態想ふべし、

当時大学の同窓か演説の稽古にとて設けたる共話会には、互ひニ演説の稿を作り演説したる者なるが、此節の学生よりも文章ハ甚た拙なるものなりし(その頃の草稿ハ三冊丈保存され、今余より寄贈して早稲田の図書館ニ蔵しあり、(図版4)これには今大家」(3ウ)となりたる博士

連の草稿幾篇もあり、何れも見ると足らざるものなり、自分のも勿論の事)、自分ハ大学を退いて後、思ふに新聞記者とならんとするには文章を練習セざる可らず、如何なる題にても咄嗟筆を執り、相当の議論を立て、相当の文章を遣らざる可らずと、扱て当時日課として社説を作る意にて、二ヶ月計り一日も怠らず界紙三四枚何によらず新聞口調にて筆を走らすことを力めたり、此の練習か幾許役立ちたるや否や、判然セざ



図版4 「一橋大学共話会演説稿」のうち市島春城「下等社会教育論 第一編」(春城資料. 744)

れど、少なくとも一氣ニ書きおろして加筆せず稿を脱するまでに至りたるは、此の練習の效と謂ふを得べき歟、」(4オ) 自分か新聞記者として起ちたる経歴を語る前一二の記すべきことあり、そハ帝大在学中のことにて前ニ福地と面会の項ニ云々セシ言論ニ関する建議の事なり、官立大学の学生の身分を以つて政治的建議をなしたるハ実に吾等か嚆矢にて、亦自分の政治行動の第一着歩と謂ふべし、当時民権論囂然たる時にて、政府ハ一意言論を拘束するニ汲々たりし折柄、学生官吏の政談を為すを禁するのみか、他人の政談を聴聞することすら嚴ニ禁したり、吾等はこれを謂ハれなしとして元老院ニ対し其禁を解」(4ウ) かんことを建議セリ、今日斯る建議を大学生か為したりとて珍らしくもあらず、亦そのために大学総長の忌諱に触る、如きハあるまじき事なれとも、当時ハなか／＼左様にまへらず、大学校長の思惑次第にて或ハ退学処分ニ出んも知る可らざる危険ありし、去るか故に此の事の建議を思ひ立ちたる、岡山兼吉、山田一郎并ニ自分ハ極めて秘密ニ会合して案を作り、愈々発表の日ハ到底退学処分を免かる可らずと覚悟を定め、さでどうセ退学処分を受くる訳ならバ、吾等の意見を先輩や友人にも示すに」(5オ) 若かずと四五十枚の建議書を印刷ニ附して之れを各新聞社を始め種々の方面ニ配布したるが、大胆にも当時の大学長加藤弘之ニも之れを呈したり、當時新聞社にては往々吾等の意見ニ賛同するものあり、此の建議書の全文を紙上ニ登載して、新聞條例ニ問ハれ、処罰を受けたるものありし(當時ハ建白書を新聞紙ニ公載するを禁するの條例ありしなり)、乃ち静岡の東海暁鐘新報の如きハ此厄ニ罹りし一例とす、如此く條例ニ問ハれたる新聞紙ハ一二ありしが、吾等ハ終ニ校長より何等の沙汰もなく、其俤ニ放任されたるは、寧ろ案」(5ウ) 外なりし、今顧ふに、加藤総理ハ学者肌の人にて要路ニ阿諛することき官僚校長ニあらさりし也、

其後自分ハ已ニ大学を去つた後であつた様に思ふが、岡山、高田、山田一郎、山田喜之助と自分合著で主権論を公刊したことかあり、其後政党論を或る人か出版した(東海暁鐘新報か前叙のことく吾等のために厄ニ罹り、それか縁因で其社の

社主が主筆であつた土居光華⁽¹⁰⁾と云ふ人か出版した、主権論を何故に著したかと云ふと、当時都下の新聞紙ハ民権論より漸く進むて主権論に移り、各社の社論ハ全力を傾けて此問題を論議した、そ」(6オ)こて自分共も負けぬ氣で遣つたのであるが、五人懸りの合著と云ふても四号字で百五拾頁位な薄べらの本で、オースチン⁽¹¹⁾の焼き直しの様なものであつた、国体ニ触れて是非することハ危険であると感じたから、結論ハ甚たばんやりしたものであつた、政党論も大学ニ於てフエネロサの講義やウールシー⁽¹²⁾の政治学などを参酌して書いた短篇のもので、今考へると幼稚のものであるが、当時政党の原理などハ世に知られて居らぬ頃であつたから、田舎政治家などの参考となつた様子で、三十年ばかり後、大隈侯ニ随つて佐」(6ウ)賀ニ入つた時、曾つて初期の議會ニ選出された某議員ハ、貴下の政党論を読むて大いに益する所かあつた、自分の当時の選挙演説は貴下ニ負ふ所少なく無いと札を陳べられたことがある、

自分の政治生活ハ小野東洋(梓)ニ接し、政党組織ニ参画してから始まるのであるが、それを叙するに先ち、大学在学中ニ立戻り一二云ハねバならぬことがある、大学には同年生が演説の稽古や學術の研究の爲めに一二の会かあつた、自分や岡山や山田一郎や田中館愛橘⁽¹³⁾や中原貞三郎、藤田四郎などの属して居つた」(7オ)のが共話会で、高田早苗、坪内雄蔵、関直彦などの会ハ晩翠^(マ)会であつた、共話会の方ハ会員が多く、後ニ脱会して戊寅社と云ふ会を立てた、有賀長雄、三崎亀之助などの面々も初めは皆共話会員であつた、高田や坪内などハ同年生であるに何故別ニ会を立てたかと云ふと、初め開成学校ニ入つた頃、寮舎が異つて居つた關係から別ニ会か出来た訳で、格別深い意味のあつた訳でハなかつた、さて共話会でハ銘々思ひ／＼覺束ない演説を遣つて会員互ひ／＼聞へたり、聞かされたり、孰れも拙なものであつたが、人前ニ演説めかしき口を開くと云ふハ自分ニ於てもこれか抑々であつた、」(7ウ)各々か追々上級ニ進むにつれて各々も前途の方針か漸く定まり、又各々の性格も段々に鮮明に成つて來た、そうなつて來ると今までの様にゴツチャになつて居り兼ねる様なことが起つて、共話会か終ニ分裂するに至つた、これが

〔明治十二〕八七△

戊寅の年で、有賀外関西より来た連中の多数か何かつゝ、まらぬことを言ひ立て、脱会の上別ニ一会を立つることになった、脱会組の言立てには、どうも共話会ハ振ハぬ、吾等の去るハ激励せん為めだと云ふた、共話会側でハ脱会連を謀叛人と見做し、有賀長雄か何か理窟をならべた脱会理由書を携帯した時には、当時講義堂と云ふ処か此等同窓会の会場であつたが、そこ（８オ）に会を特ニ開らき、退会ハ勝手ニ任するか、生意氣な申立てハ会ニ於て拒絶すると云ふ様な見幕で、自分や岡山や山田一郎や田中館や中原などが盛んに有賀を困めたことを今も記憶して居る、斯のこゝ共話会は分裂したが、実ハ地方別と各々の性格か此の分離の因を為したものである、妙なもので後には戊寅社組ハ抵ね官途を志し、共話会組の多くハ非政府党となつた、但し共話会員の内にも理工科を専門として居るものハ政治ニ没交渉であるから、官途に就いたものもあるか、大態非官僚の色彩を帯び、暗に戊寅社連の卑屈を嘲笑したものである、斯くの如く、戊寅社とハ相（８ウ）軌る關係となつたか、一方の晩翠会の一角と共話会の一角とか追々接近して堅く結ふ様になつた、即ち高田外二三子と我等の結托である、実ハ性格の近きより此關係も生じたのだが、一ハ又地方關係もある、自分などハ越後出身であるけれども、東京の英語学校から開成学校ニ入学したものであり、氣風ハと云へバ関東氣質であつた、山田一郎などハ関西出身であつたが、自分や岡山ニ懇意であつた所から矢張関東氣質で、官僚興氣を排斥した、高田ハ純粹の江戸児であるから、吾々とおのづから意氣が投合した、斯る關係から、後年戊寅社よりハ多く政府党が出で、共話会からハ非政（９オ）府党が出た、高田の仲介で小野東洋ニ交ハリ、終ニ大隈参議ニ謁して、改進黨と云ふ非政府党の組織を策した其の根本の先素か多く共話会側ニあつたことを考へると、書生の同窓会もなか／＼天下の大勢ニ關係が無いとハ謂ハれぬ、

当時吾れ／＼ハ大学ニ於てどんな學課を本科で修めたかと云ふと、自分や高田や天野や山田一郎などの文科專攻のものは皆な政治經濟であつた、大学ニ於てハ自分か本科ニ入る一年前ニ始めて文科を設けた訳で、まだ創設間もない時で

あつた、文科と云ふからいろ／＼文学ニ関する科目もいくつもあつたが、われ／＼に尤も大」(9ウ) 切な課目を教へた教師ハフエネロサで、此人ハ哲学も経済も政治も社会学も受け持つた、此人は後年日本の美術を發揮して、空前の名を成した位な、頭腦の如何にも明晰な人であつて、どの教師よりも大なる薰陶力があつた、此人ハまだ米国の大学を卒業したばかりの人で謂ハ、新しい学問をした人であつた、随つて最早ルーソーの民約説などをひねり廻ハすことき時勢後れの講釈などをセなんだ、政治学でも哲学でもすべて穩健な説であつたが、兎三角官立大学で公然政治学を教へたのは當時ニ於て刮目に値する事実と云」(10オ) ふてよろしい、その當時并ニ其後も政府が学校ニ於て政治的講釈を甚しく忌むだ事から考へて見ても、寧ろ意外とも云ふてよい位だ、後々委しく云ふ筈たか、改進黨の主義綱領も実はフエネロサの講義より生じ、政府から反謀学校を以つて目された早稲田大学の前身、東京専門学校なる政治学校の教授も皆な此教師の生んだものであることを想ふと、実ハ意外の処へ飛火(とびひ)のしたもので、恐らく帝大ニ文科を起した政府の予料の外であらう、何れにしてもフエネロサは自分其他の同志に大なる薰陶を与へたニ相違ない、」(10ウ) 自分が今一年で大学を卒業するのに、それニ先たち社会ニ飛出した原因の一つは、當時の政治的氣運ニ促されたのであつた、小野梓と云ふ人ハ官途ニ在つたが學者風の政治家で、當時「共存同衆」⁽¹⁴⁾と云ふ研學的の団体ニ専ら力を致して居られた、その時々雜誌などに掲出された論文などを読んで自分等ハ種々の点ニ同感を寄せたものである、此頃本郷ニ進文学舎と云ふ私塾があつて、高田外二三の友人ハ課業の余暇を利用してその塾の教鞭を執つて居つた、⁽¹⁵⁾然るに偶々此の塾の構内に小野梓の属僚であつた小川為次郎が住むて居つたので、高田や自分共カ懇意となつた、小川ハ別」(11オ)ニ規則立つた学問をした人でハ無かつたが、学問好きで、高田やわれ／＼を小野ニ紹介することになつた、小野と云ふ人ハ当時大隈參議の高等幕僚の一人であつて、藩閥政府を斃さんため大飛躍の心かけがあり、それにハ主として有為の人物、殊ニ學問の素養あるものと接近し提携し、小野カ仲价となつて大隈參議ニ結びつけたと云ふので、

先づ高田か小野ニ接し、それより自分や岡山兼吉、山田一郎、山田喜之助、砂川雄峻、天野為之、外二三子が小野と交ハルことになつた、それから間もなく、皆々小野ニ伴ハれて当時雉子橋附近の邸ニあられた大隈参議に謁した、これ（11ウ）が大隈侯の旗下に立つことになつた発端である、

小野君ニ交ることになつたのは単ニ友人となつた計りでハなく、政治上ニ何事をか為さん為めであつた、小野君ハ大隈参議の幕僚でわれ／＼ハ小野君の幕僚と云ふ有様であつた、当時大隈参議の幕僚には慶応派（或ハ報知社派とも云ふ）の矢野、尾崎、犬養あり、嚶鳴社派（或ハ毎日新聞社派とも云ふ）ニ沼間、島田あり、小野ハ共存同衆の一固を有して居つたが、これは政社的のもので無つたために、大学からわれ／＼を引き来り、他の二派と對抗せんとしたのである、大学に教育を受けた面々が後れ馳セに報知、毎日派などに入籍すべきでない、別」（12オ）に小野氏を擁して一旗幟を樹ることハ頗るわれ／＼の意ニ投じた、就中自分の如きハ勇躍して之れを喜こむものである、

当時小野君ハ橋場の小野義真の邸内⁽¹⁶⁾に居られた、橋場の行きつまりに神社がある、その隣地か小野君の居であつた、大学からハ大分遠くあつたが、皆／＼数々通つたものである、当時の大問題ハ官有物不当払下問題で、小野君か会計検査官であつた丈に此の問題を捕ひ、大隈参議もこれニ抛り藩閥の打破を策した、即ち大隈参議ハ国会を開設すべしとの議を建てた、恰度御巡幸の折りであつて、大隈参議も供奉員の一人であつた、此時ハ藩」（12ウ）閥の運命の岐る、時であつて、藩閥者流ハ大隈参議か帰京すると同時に逼つて辭職せしめた、さて国会開設の議ハ当時の氣運、藩閥者流ハ已か命運を縮むること、知りなから、之れを糠ミ潰すことか出来ず、明治廿三年を期して議會を開くの詔勅を煥發された、大隈参議ハ朝廷を退かれたが、其議ハ成立したのである、

個様な時勢であつたから、吾々か小野君を訪ふて何事を策したかと云ふと、政党樹立のことであつた、勿論自由党ハ既ニ起つて居つたが、其の過激の言論挙動ハ識者の指彈を受けつ、あつた、吾等の策した政党ハ非藩閥党たる点ニ於

てハ自由党」(13オ)と同様であるが、仏蘭西の政党の反訳のとき、イザと云へバ政体までも変更せんとする、自由を得ん爲めには手段を問ハぬと云ふことき危険なる政党を排し、秩序的進歩を企図する政党の樹立を策した、當時の藩閥政府ハ大隈參議を忌憚すること甚しく、既ニ野ニ下つた候を^(原)圧迫することか非常であつた、勿論其の動靜を監視するに力めた折柄、大隈を戴く政党の樹立を策する訳であるから、劍呑であつた、自分ハ既ニ大学の籍を離れて居つたが、他ハ皆在學生の身分を以つて個様なことを策するのであるから、藩閥政府から見ると、謀叛人も同様である、そこで銘々小野君を訪問するにも」(13ウ)注意セねバならぬと用心して、最初ハ皆々打揃ふて往来したものが、追々一人／＼目立たぬ様にして往来した、亦会合にも名の必要を感じたが、わざと橋場の渡しの名を取り、鷗渡会とよび、風流の会であるかの如く見せかけた、

書生離れのセぬ吾ら面々か、此鷗渡会ニ於て政党の樹立を策するにつき、當時高田や自分共のときフキねロサの門人の腹笥とも云ふべきハ其の講義筆記より外ニ無かつた、フキ氏の哲学講義ニ人生の目的を幸福を得るに在り、而かも其の目的を達するには手段を藉らざるを得ぬ、と云ふことき一節が、新生党の宣言の骨子として小野君ニ取」(14オ)られた、小野君ハ宣言書を稿するに余程苦心されたが、初稿は全然われ／＼の提出した講義筆記のある緊要の部分を反訳した様なものであつた、それを幾回も幾回も稿を改めて、漸く痕跡を没する様になつたが、精神ハ変して居らぬ、而してこれか立党の時ニ發表され、且つ長く改進黨の宣言となつたのであると思ふと寧ろ意外の感ニ打たれざるを得ないが、それか實際である、

此鷗渡会ニ於て小野君か當時著作中であつた国憲汎論⁽¹⁷⁾のあらすじなどを聞かされた、小野君ハ土佐の人で弁舌ニ威嚴かあつた、坐上の談論でも儒夫を起たしむるの慨かあつたので、皆／＼小野君」(14ウ)の演説に倣はんとした、ある時ハ小野君を聴者として、各々演説を試み、その批評を聴たこともあつた、兎ニ角政治行動の門出に小野君より種々

大切な政治教育を受けたことハ確かである、

最初小野君やわれ／＼の意気でハ政党が樹立されたならば大隈侯を総理にするハ勿論だが、小野君を擁して吾々が其の中堅となる意気であつたが、扱て實際の場合ニ至ると、報知、毎日の連中ニ花を持たせねバ治まらぬ様になつて、小野君ハ党の掌事となり、専ら政治的方面を担当することになつたが、われ／＼ハ蔭の身」(15才)となり小野君の帷幕ニ参する丈の事で、甚だ物足らぬ気がした、併し報知派、毎日派の面々ハ既ニ政治的経歴を有して居るから、之れに譲るも纏まりの爲め已むを得無つたが、扱て困つたことには此党か生れ出るや否や、政府ハ種々の方法を以つて圧迫を加へ出した、中にも政社と認定して加入者の姓名を届け出てねバならぬ様な政党あるましい繁縷の面倒を余儀されたので、折角生れ出た立憲改進黨も充分働らく事が出来ず、一たび意氣天を衝かん計りの勢にて大隈参議と進退を共にして退朝連も追々弱腰となり、政社名簿の爲めに実業方面の同志ハ政府より妨害を受」(15ウ) けんことを虞れて追々脱党し、党運ハ日を追ふて非なるの形勢を現した、

唯た此の間ニ早稲田大学の前身たる東京専門学校が小野の斡旋ニより大隈侯ニ創立せられ、又一の新聞紙が生れた、学校の設立ハ鷗渡会ニ列した面々が皆な与つて教鞭を取る事になつたから、政党の厄運ニ会した代りに此方面ニ轉じて力を用ゆることか出来た、新聞紙ハ基礎が薄弱であつた爲めに半歳も持続することか出来なかつた、その新聞紙と云ふは当時東京新誌と云ふ綺語を弄するに名を博した、服部誠一と吾等か協同して」(16才) 服部の所有ニ属する九春社から発刊した「内外政事情」であるが、隔日刊行の小新聞であつた、此の新聞には山田一郎と自分か専ら当り、追々ハ基礎を固め日刊新聞として報知毎日ニ對抗する積りであつたが、うまくゆかず廃刊する事になつた、全体服部ハ營利主義で此の新聞を創めたのた、それを自分共が割り込むで行つたのだから、根本ニ面倒があつた、且つ既ニ報知毎日が党派の機関としてあるのに、これをもち立つるは贅であると云ふ論もあつたか、一つにハ報知毎日両社の疾視を

受くるを不利とした小野君の顧慮もあったのと、党の根本的悲運三会したなどで永続が出来なかつたが、併し自分が新」(16ウ)聞ニ責任ある署名をし、且つ筆を取つたのハ、これを以つて初めとする、此新聞の発刊より廃刊に至るまでの始末を当時自記したものがある筈、それを参照するの必要がある、⁽¹⁸⁾

(図版 5)

此頃の事で自分の一身ニ関係あることか一つある、政治方面からハ外れて居るが、こゝに略叙して置く、それハ生

計上の都合から三菱会社⁽¹⁹⁾ニ傭使の身となつたことである、当時三菱会社の社長は岩崎弥太郎、副社長が岩崎弥之助で、会社の所在地ハ南茅場町であつた、小川為次郎が会社ニ居つたのが橋かけで、小野梓君の義兄義真と云ふ人も三菱の重役で」(17オ)あつたなどの関係もあり、梓君より入社につきいくらか口を利て貰つて會計部と云ふに入つた、併し一年も経たぬ内に自分から辞し去つた、と云ふのは、自分には実業家になる志もなく、三菱の社員となり将来の利達を図る念も無つた、唯た一時生計の都合上深い思慮もなく、入つて見ると、会社ハ実ニ一王国とも云ふべきもので朝ハ早きを競ふて出社し、夜ハ幾んど毎晩社員同士の宴会あり、幾んど新聞すら読む違もなかつた、況して政治など



図版 5 市島春城「内外政黨事情廢刊ノ顛末」
(春城資料. 772)

にたづさへるべき余地も無く、亦会社も之れを許さなかつた、当時の自分は政治以外ニ趣味とてハ無く、これと遠さかることか何寄りもつらく、終ニある」(17ウ)政治上の大切な事のあつた折、堪へかねて退社した、その時ハ自分を入れて呉れた浅田正文⁽²¹⁾と云ふ人も留守、副社長も同じく留守の場合であつて、如何にも無理な退社の仕様であつた、重役の莊田平五郎⁽²²⁾が自分ニ向ひ、そんな短氣を起さぬかよい、その内洋行もさせるなど、慰められたが、それにも耳を藉さず、一散ニ飛び出したのは三菱ニ不満のあつた訳でハ無く、政治ニたづさへることが面白かつたからである、此の卒爾の退社ハ小野君の感情を害し、ある時訪問したが謝して面会を断はられた、自分ハ筆硯を借り立なから丈余の書簡を認め、自分の志」(18オ)を縷述して小野に示した処、小野君も流石わかつた人であつた、自分の既ニ門外迄出たものを人をして呼び留めさせ、いつもの如く快よく応接された、其後千葉県の房州より小野君を招待して演説を請ふた時ニ自分ハ随つて行き、各所ニ演説を試みた、これか自分の処女演説であつたが、小野君と同行したのは実ハ中直りの意味であつたのだ、

自分が越後高田ニ聘されて高田新聞ニ筆を執つたのハ福島事件や加波山事件などの余波か及び、高田事件と云ふが起つた時であつた、高田事件の内容ハ実は格別のものでハ無かつたのであるが、此頃の政府ハ自由党を忌むこと蛇蝎の如」(18ウ)くであつて、動もすれば杯中の蛇影にも驚いた位なことであるから、高田の自由党中、穩かならぬ挙動かあつたと云ふので、直ちに福島事件の二舞をする者かの如く重大視して、党の領袖を初め、三四十名を逮捕し、越後ニ空前の大疑獄が起つた、此の物騒な政治問題に刺激された上越の反対党、即ち上越改進黨⁽²³⁾ニ属する面々ハ新聞を起さんとして主筆を東京ニ物色するに方り、自分が行くことになつた、乃ち主筆を得て第一号を発刊せんとするので、新聞ハまだ生れて居らぬのである、自分ハ経営の衝ニも当らんと欲し、主筆と云」(19オ)ふ名を避けて社長の名を以つて応じた、但し土地の大株主の内から中川源造と云ふ人を社主に推し、金銭上の事ハ此人か責任を負ふた、今の帝

国通信社々長竹村良貞氏⁽²⁴⁾が印刷長と云ふ名義で紙尾ニ社長と共に名を列した、

東京で内外政事情ニ関与して多少新聞ニ経験ありとハ言ひ、実ハ一社を創設し、その創業年代の新聞を主宰するに自分は甚だ覚束ないものであつた、併し自分ハ多少ニ拘らす新聞ニ経験ハあつたが、編輯局ニ集まつた面々ハ皆な高田出身のもので、一人も新聞ニ筆を取つたことの無い連中であつた、但し創刊頃の新^(19ウ)聞ハ普通新聞より半分の大きさの小新聞で、印刷機械ハ未だ社ニ備ハらず、他の印刷会社ニ托して刷行すると云ふ仕末であつた、当時自分も筆ハまだ熟せず、生硬の文章を書いた頃で、創刊勿々主題ハ高田事件であつたことハ言ふ迄も無かつた、此事件ハ自分等の反対党の嫌疑事件であるが、藩閥政府を敵とする点ニ於てハ反対党も同様である所から、此意味ニ於て高田の自由党ニ同情を寄せた、当時越後にはいまだ自由党ニ属する機関新聞ハ一も無つた所から、新たに生れた反対党の新聞が好意的態度を⁽²⁵⁾「(20オ)示したと云ふので、越後全国の自由党の好感を博し、郷里水原の友人にて反対党ニ属する羽田や安孫子などハ長篇の詩を自分ニ寄せて心事の高朗を称賛した者であつた、藩閥政府が蛇蝎視する自由党ニ対し、同じく嫉視されつゝあつた改進黨の新聞が呱呱の声を挙くると共に自由党にハ好意的態度を取り、政府には反抗の筆を揮ふのであるから、崇^(カ)の早晩来るべきハ逆視するに難からさることであつた、当時の新聞條例ハ如何にも峻厳の者であつて、之れに触れぬ様ニ注意するのが社長なり主筆なりの第一の任務とも云ふべき者で、今の新聞^(20ウ)記者などの想像の及ばぬほどの者であつたのに、糅^(カ)加へて、福島事件などの騒動ニ顧み政府ハ一層條例ニ峻烈の改正を施した、其の改正の主要の点の内に、従来新聞紙條例違犯ハ署名の編輯長のみか責を負ふことになつて居つたのを、今度は署名者ハ社長でも印刷長でも皆編輯長と共に犯を以つて論すると云ふことに改まつた、即ち編輯長は従来、有名無実のものであつて、入獄覚悟の者を署名せしめた慣例ハ爰ニ破壊されたのである、此のやかましい條例が出る前には、東京の大新聞ハ何れも社長や主幹の名を署したものであつたが、此の改正の発布

(21才)と共に皆な一斉ニ名を除いた、自分もそれニ氣のつかなくつたでハ無い、友人からも名を除くべしとの注意もあつたが、新聞も出て、からいまだ月日も多く経たす、自分の名も広告用として幾分必要もあつたから、その俶取り除くことをせなんだが、それが禍の本で、続々起つて来た違犯事件ニ対し、社長たる自分ハ連坐を免かる能ハさる事ニなつた、

当時ハ官尊民卑の余習いまだ法律にも存する時で、新聞條例や刑法にも官吏侮辱と云ふ刑がいかにも厄介なものであつた、檢察官の手加減で、愚にもつかぬことまでも官吏侮辱として公訴するが、(21ウ)此頃の常例であつた、又予審の下調ニ関することを紙上に載す可らさるハ知れ切つたことであるが、これとても程度問題で必らずしも問ふべきでないことハ、今日の新聞紙の實際ニ徴してもわかることだが、此時分の杓子定規ハ実ニ言語ニ絶へたものであつた、檢察官ハ常ニ敵意を以つて新聞紙や政客を見たものであるから、苟くも羅織して罪となし得ることハ、細微漏さず罪の材料としたから溜まらない、高田事件ニ対し、警察署長か取調をなすに当り、其の無学を暴露した一笑話を滑稽の談として掲げたのが直ちに官吏侮辱罪として起(22才)訴され、且つそれか罪となつた、今日の新聞雜誌などで大臣の内行を評し、動もすると罵倒を極めても、敢て問ハれざるに比し、実ニ天壤も啻ならざる相違で、今日の記者か逆も想像し得ざる、馬鹿氣たるものであつた、而してその馬鹿氣たる犠牲ニなつたわれも馬鹿だと云ハれても一言も無いが、全国ニ数多き新聞社の社長として、又主筆として、此の言論史ニ特筆すべき改正の第一の犠牲となつたものハ実に自分である、」

社長たる自分か罪ニ問ハれた位であつたから、編輯長名義の者ハ幾人か罪を得た、印刷長たる竹村も自分と共に共犯を以つて論せられた、何んでも一時起訴事件か輻輳して(22ウ)自分ニ係る者丈でも四、五件位あつた、自分ハ性来粗豪で意氣の人であるから、此の事件の公判などにも何も知らぬと言ひ張ればそれで免かる、道もあつた様であるが、

虚偽の申立をするハ本意で無かつた、且つ公判に素人が長く弁論するハ却つて毛を吹て疵を求める虞れかあるのに、自分ハ公判の場合を利用して政治的鬱懷を漏らした、それかために一層罪を重ふした様な氣味もあつた、數罪俱發で問ハれずに済むた罪もあつたが、重輕禁錮八ヶ月と云ふか結局刑期の総メ高であつた、此の法罪を控訴し上告して、其の決定を得るまでに一年もかかつたから、其間ハ平然社務ニ従事したが、保^(23オ) 釈になつて居る身分であつたから、余り表立ちたる政治運動も出来なかつた、唯た筆の上でハ間斷なく働らいた、高田事件が終局を告げて後、高田に於ける一大問題とも云ふべきハ信越鐵道を私設で架設せんとするの議であつた、これは政治問題でハ無いが、自分の同志者で土地ニ声望ありし室孝次郎其他か發起して大努力を遣つたから、高田新聞も力を極めて之れを幫けた、自分か高田ニ在つて主として力を入れたのは此の問題であつた、

当時東京より越後ニ至る方面の鐵道とてハ前橋高崎迄さへ敷設しあらず、如何にも不便の事であつた、ある時新聞の用紙か到達延着の爲め、已むな^(23ウ) く一ヶ月程の間日本紙を代用したこともあつた、鐵道ハ終ニ私設の許可を得ることか出来す官設となつたが、之れを促すに私設の運動の興つて力ありしハ言ふ迄も無い、

高田新聞在社中の事ハ後年同新聞の紀念号ニ一二度當時の思出をかいたことがある、それか今張込中ニ存して居る⁽²⁶⁾ からそれニ讓ること、して委しくハ書かぬ、唯たこ、に一二録して置くのは、自分の在社中に小野梓君が新潟へ遊説の途次立寄られて高田ニ一泊された、その際ハ他郷ニ親族を迎へた様な氣かした、又此頃新潟の新潟日々新聞と云ふ同主義新聞の主筆^(24オ) 佐瀬精一氏が高田へ演説ニ來たことかあつて、初めて交ハつた、又佐瀬氏の新聞ニ筆を執つて居つた枝元長辰^(トキ) (薩州人で慶応出身) と云ふが、同新聞財政困難の爲め退社帰京の途次、雪中自分を訪ハれた、自分ハ氣の毒の感ニ打たれ、自分の幕賓として高田ニ止まることを勧めた、枝元も承諾したから數ヶ月間社を煩すことなく、自分の助手として日々編集局に出勤し、筆を執つた、此人ハ後々東京へ戻り、改進黨新聞の主筆となつたが、早く歿し

た、

自分の控訴上告も追々判決があつて多くハ始審通りと決し、爰に牢獄ニ入るの身となつた、共犯」(24ウ)者ハ竹村良貞で、編輯長ハ既ニ三人入獄して居つた、吾々兩人ハ先づ高田の監獄に収容され、それより間もなく新潟の本監ニ送られたが、新潟監獄ニ移つて間もなく、副典獄(當時典獄ハ欠員であつた様ニ思ふ)に交送^{マダ更}があつて、代ハつて来たのが高田の警察署長赤津某で、これがわれ／＼より侮辱されたと云ふて起訴をした張本である、時も時、此の被害か新潟監獄の主長に転じて来たのは、われ／＼には甚た不幸の事であつた、但し前典獄の時から高田新聞の記者に対し、特別苛刻^{マダ酷}の待遇をなすべく内訓もあつたものか、前に入」(25オ)つて居つた社員か内密告けたのには、自分共も這入りかけ四五日ハひどく遣られました、あなた方も用心なされと云ふた、果して其言のことく、自分等兩人ハ入獄早々特別扱と云ふ訳で、外役に廻ハされた、全体獄内には種々の駆役場があつて、囚人の位地や体格や職業などに応じて、それ相應の仕事を遣らせることになつて居り、外役と云ふのは土方^{とがた}のする様な力づくの仕事であるから、われ／＼のことがそれニ不適當であるハ云ふ迄も無い、然るを特ニ看守長より命を下して、此の不適當の仕事ニ廻ハしたのハ、虐使して復讐的の腹愈^えセを為さん陰険の所置であることハ當時の事情ニ於て明」(25ウ)かに読めて居る、自分等ハ三四日間、獄外ニ土砂や材木などを担かせられて、幾んど当惑した、同じく外役ニ出て居つた囚人中ニ吾等の加ハつて居るのを不審ニ思つて、あんな者をなぜコンナ仕事ニ使役するのであるか、却つて邪魔になると、看守ニ訴へた時、看守ハ上官よりの命令であると言ふたのを自分ハ側らに聞えた、そこで自分共の外役ニ使役さるゝのは、復讐的の懲罰で、偶然でハなく故意であることが愈々明瞭になつた、

扱て三四日斯る苛遇を受けた後、日曜ニ際し、獄規にもとつき囚人壹千名ばかり一場ニ集合、」(26オ)教誨師より教誨を為すに先たち、副典獄の赤津か場にあらハれて余の名を高く呼び上げ、今日以後日曜毎ニ教誨をやつて貰りたい

と云ふたのに、自分ハ意外の感ニ打たれたが、よく／＼考へて見ると、これか彼れの陰險手段であることを覺つた、初めハ知らざるまねして人を困しめ、漸くにして俺れか救ふて遣るのだと云はんばかりに恩を售るの、陋劣なる心術ハあり／＼と読めて失笑したが、さて其後幾日も経ぬ内、上告事件が大審院ニ於て原裁判を破毀し、長野の裁判所へ移すとありて、吾等兩人ハ長野ニ護送さるゝことになり、斯くて其後長野監獄ニ於て刑期の大部分、即ち七ヶ月余を」(26ウ) 過すことになり、烈寒の冬期も長野ニ於て暮らした訳である、

長野ニ移されたことハ自分ニ取り非常な幸であつた、当時郷国出身の大野誠⁽²⁷⁾が県知事となつて居つた關係から、郷人か多く枢要の地位ニ居り、親戚熊倉美雅君も亦、相当の地位ニあつた、此等の關係から、監獄でも特別の保護を与へて呉れて、典獄の三浦某と云ふ人のことさハ、囚人たる自分を十年も知り合つて居る人の如く遇し、未決監ニ居つた時などハ、時々慰問のためニ見舞つても呉れ、差入れもの、菓子箱などハ箱の俵ニ入れてくれたり、共犯人なる竹村を話し相手にとて同」(27オ) 室に入れて呉れたりした、或る時(まだ未決監ニ在つた時) 典獄から呼び出されて典獄室ニ入つた、典獄は相当の礼を以つて自分を遇し、椅子を与へて対坐し、自分に依頼があると云ふから何事かと聞へたら、貴君の監獄ニ対する説は、高田新聞で拝見をして居る、どうか当監獄のためあなたの在監中一筆を著して貰はれまいか、と云ふ事であつた、自分ハ入監前よりフトしたことから少しく心掛もあり、入獄して見ればいくらか発明したこともあり、出獄後ハ何か書いて見たいと思つて居つた處へ個様な注文であつたから、一も二もなく諾して参考書などハ」(27ウ) 監獄の蔵書を借覽すること、なり、未決中にそろ／＼準備を始めた、筆を執り初めたのは、実決の後、筆硯か自由になつてからであるが、三四月か、つて初稿を脱し、監獄論十章⁽²⁸⁾を著ハした、此の論の骨子ハその頃世界中で尤も理想的ニ工夫された、マコノキ―と云ふ人の案を敷衍したものであつた、竹村が自分の草稿を清書し出獄の時ニ典獄ニ出して其の囑を充した、

長野在監中の起居、その他の消息ハ別ニ委しく書いたものがあるから、こゝには詳記を略するが、維新以来国事のため、文」(28才)禍の爲め獄ニ下つたものハ少なくないが、自分の如く破格の待遇を受けたものは恐らく他ニあるまいと思ふ、其の消息ハ別ニ書いたもので悉してある、さて爰ニ入獄の経歴の筆を収めんとするに当り、數言を要する者ハ、此の入獄の不幸なる出来事ハ如何なる影響を一身ニ与へたかの一事である、勿論自ら罪と信せぬ事で獄ニ繋がれたのであるから常事犯のこゝと感化を受くる筈もなく、改悛の必要があるでもない、唯た、自分ハ初めて人生の行路難を感じた、共に人心の崎嶇ハ如何にも危険なことであることを知つた、自分はこれ迄有体ニ云へバ嘗つて苦勞」(28ウ)と云ふものを知らなかつたのであるが、爰ニ初めて苦勞と云ふものを感じた、亦獄中ニ特待を受けて氣楽であるとハ云ひ、身体の不自由を感じてハ自由の有り難た味を今更の様に痛切ニ感じた、最初、苛刻の待遇を受けた時には、内心大いに激したが、よく／＼考へて見ると監獄のことと秘密の場所ニ於て憎まれて殺された所で殺され損であると氣がつき、自重する念起り、漸やく此の不幸の場合を利用して修養ニ資すべしとの考も出で、粗豪氣鋭の素質を矯抑するに力めたが、幾許か其効があつた様に思はれる、全体監獄」(29才)極端なる専制の天地である、司獄者の權は王侯のそれの如きものがある、故にその圧迫のために動もすれバ卑屈の性を馴致するの虞もあり、且つ衛生設備の充分ならざる監房ニ起臥飲食の結果、或ハ病ニ罹り、永久不治の不幸ニ陥ることもあるが、自分の幸ハ新渴より長野へ移されたことで、長野には種々の便利があつたばかりでなく、監獄の設備も新渴ニ比すれば復かによく行届きおり、此の獄ハ乾燥のため疥癬を患ふる囚人などハ絶無とも云へる位で、現ニ自分は在監中一日も病むたことなく、平素一日も廢」(29ウ)し得さりし酒も境遇上一年近かく絶ちたる丈にても衛生上余程の利益ありたるに相違なく、獄舎ニありては上下の尊敬を博し、布団ニ坐し、炬を擁して著述ニ従事する傍ら、獄吏の需に應じて幅や屏風を書くと云ふが日課であつたから人ニ媚ふ必要も自ら屈する場合も絶へて無くして了りたるハ、自家の修養に得たる所こそあれ、八ヶ月間活世

界ニ遠ざかりたる損失ハ差引左まで多からざりし様に考へる、(二三アキ)」(30オ)

30ウゝ44ウ〓白紙

自分の生活生活(マヤ政治生活カ)は一生の三分一を占めて居るが、結局失敗に歸したのである、この失敗の大原因は始終失意の位置ニ立たれた大隈侯の旗下ニ属したからでもある、藩閥も末路とハ言ひなから、情勢ハなかゝ悔りかたきものである、自分のみか四十年も政治生活をつゝけて居る、同興味の連中も余り成功とも言ひぬ位である、併し自分一個ニ就てハ失敗の原因とも云ふべきことがさまゝあるニ思ふ、第一自分のために甚だしく損であつたのは、中央に居らず地方ニ出かけたことである、郷里の政界を開拓するに自分は功があつたに相違ないが、自分に取り」(45オ)てハそれが損であつた、勿論自分にも政治家たる素質にいろゝ欠点があつたことを自覚する、自分ハ意氣の人で智略の人で無い、何んでも意氣で押し通して行かふとしたのが、いろゝ失敗の原をなして居る様である、混濁なる政海を泳ぐには自分は余り潔癖か過ぎた様に思ふ、自分か今少しく悪であつたら、人を排擠しても頭を擡げ得たであらう、自分ハ意氣を本位としたから、周到の用意か足らなかつた、若し今少しく用心かあらば、高田に於ても繫獄の身とならなかつたであらう、第一回の選挙の敗ハ已むを得ずとするも第二回の選挙に勝を」(45ウ)判しなから資格の観点で投けるゝことも無つたであらう、何んと云ふても血氣の年輩、疎放の性質が危険な世に処したのであるから、失敗ハ寧ろ必至の結果である訳だ、自分で産を作る様な氣でもあつたならば、折角投じた三菱会社を無理鎗ニ退くでハ無かつた、当時自分より遙かに卑くき位地ニ居つた者等も、唯た永く居つた丈で、今では重役ともなつて居る、併し、自分は今となつても毫も悔ゆる意ハ無い、実ハ血氣の当時より今日に至るも産を治むるなどの念ハ無いと云ふてもよい、自分は財産趣味よりも矢張政治趣味を選ぶ者」(46オ)である、一個平凡のものが政治に努力したからと云ふて国家ニ何かあらんで、それよりも教育事業などに身を寄せれば、働く丈の甲斐もある、自分か政治を廢して早稲田の学苑ニ立籠

つたのもその為めであるが、しかし政治は年壮者流の道楽としてハその趣味ニ於て其の品位ニ於てこれより以上のものは無い、一たび政治ニ与り、一たび議政堂に上つて見なければ、政治的真意は理解され得ぬものである、自分が政治を廢しても尚且つ時事ニ一隻眼を有するものは既往政治道楽のお蔭であることハ云ふまでもない、(一行アキ)(46ウ) 47オ、49ウ、白紙

注

(1) 一八五二—一九一二、越後国長岡生の実業家。大蔵省勤務ののち、一八七三年(明治六)新潟県令楠本正隆のもとで新潟学校教頭となった。ジャパンナレッジ版『日本人名大辞典』、市島春城『新潟学校時代』、『春城代醉録』、中央公論社、一九三三年)、谷久弥『新潟学校と楠本県令』(『蒲原』十五、一九六八年)参照。なお、以下の文中に登場する人名等のうち、第一冊紹介時に解説した人物については省略した場合があるのであわせてそちらを参照されたい。また「新潟学校」はじめ、明治初年の新潟における英語教育については、解題注(15)拙稿参照。

(2) 福地桜痴(源一郎)、一八四一—一九〇六。長崎で医師の子として生まれ、蘭学、のち英学を学び、幕末には二度にわたり幕府使節団の一員として渡欧、維新後も岩倉遣外使節団に随行するなど、二度洋行し、見聞を広めた。一八七〇年(明治三)『東京日日新聞』に入社、以後主筆、社長として多方面にわたる論説記事を執筆、世論に影響を及ぼした。ジャパンナレッジ版『国史大辞典』。以下人名解説は特に断らない限りジャパンナレッジ版『国史大辞典』によった。

(3) 沼間守一、一八四三—一八九〇。幕臣の子として江戸に生まれ、長崎、横浜で英語を学ぶ。維新後は大蔵省、司法省、元老院等に勤務。一八七三年(明治六)、河野敏鎌らと法律講義(習)会を設立、一八七八年(明治十一)には同会を嚶鳴社と改称、自由民権運動へと専心するため辞職し、『嚶鳴雜誌』を創刊し、都市民権派の主流となった。さらに買取した『横浜毎日新聞』を『東京横浜毎日新聞』と改題し社長に就任、その後は立憲改進黨結党に参加する。

(4) 末広鉄腸(重恭)、一八四九—一八九六。伊予国宇和島に生まれ、藩校・明倫館に学び同校の教授となる。一八七四年(明治七)上京し、大蔵省に勤務するも、翌年には『曙新聞』に入社し、同年公布の「新聞紙条例」を批判し、罰金、下獄。出獄後、

成島柳北の『朝野新聞』に入社、ここでも法制官を風刺した記事により成島とともに下獄。その後は政治運動と共に政治小説を執筆した。

- (5) 藤田茂吉、一八五二—一八九二。豊後佐伯藩士の子として生まれ、慶應義塾に入学。福沢諭吉に認められ、卒業と同時に郵便報知新聞社に入社、主幹、編輯長として紙面の充実に尽力する。一八八二年（明治十五）立憲改進黨結党に参加し、衆議院議員として活躍するも在任中に没した。

- (6) 矢野龍溪（文雄）、一八五〇—一九三二。豊後国佐伯藩士の子として生まれ、慶應義塾に入学。一八七六年（明治九）『郵便報知新聞』副主筆となり、社説を執筆。大隈重信、福沢諭吉の推薦で官途に就くも、「明治十四年の政変」で大隈に従い辞職。藤田茂吉、尾崎行雄らと東洋議政会を主宰、『郵便報知新聞』を買収し、立憲改進黨結党後は、党の発展のために同紙を活用した。

- (7) 一八五八—一九五四、罌堂と号す。相模国に生まれ、一八七四年（明治七）慶應義塾に入学。一八七九年、福沢諭吉の推薦で『新潟新聞』の主筆となる。一八八一年、矢野龍溪に招かれ統計院に任官するが、「明治十四年の政変」で大隈重信に従い下野、『郵便報知新聞』の論説記者となり、さらに立憲改進黨結党に参加。第一回総選挙に出馬し当選、以後一九五二年まで連続二五回当選し、六〇年以上にわたる議員生活を送り、「憲政の神様」と称された。

- (8) 岡山兼吉、山田一郎、市島謙吉「官吏及官立公立私立学校教員生徒見習生政談演説集会ノ儀ニ付建議」（国立公文書館蔵『公文録』明治十五年第一八六巻公文附録〈元老院建白書第一〉に「東京府士族岡山兼吉外二名建議政談演説集会ノ件」として採録）。国立公文書館デジタルアーカイブ収載。また、「春城雜纂」十二、十三（春城資料、六八一、六八二）にも全文が収められている。

- (9) 「一橋大学共話会演説稿」一一三（春城資料、七四二—七四四）。第一冊表紙見返に「市島謙吉氏曰ク「明治十年前後即チ余等開成学校在学當時同窓共話会ト云フヲ組織シ演説ノ稽古ヲナシタルコトアリ、当時皆幼稚ニシテ多クハ演説ノ草稿ヲ作り場ニ臨ム、ソヲ纏メタルモノ五六冊トナリシガ是其ノ中ノモノナリ、今之ヲ見レバ筆者中現今博士トナリ居ルモノ少カラズ、文章拙ナル真ニ旧惡全書ナリト」との貼紙がある（筆者未詳）。以下、各冊に収められた演説者の氏名を列挙すれば、第一冊・藤澤力、藤田四郎、三和親本、隈本有尚、第二冊・田中館愛橘、橘桶三郎、中原貞三郎、山田一郎、真崎孝八、第三冊・市島謙吉、

大屋権平、岡山兼吉となっており、日付の記されているものと一八七八年から一八八〇年の間の演説会草稿と思われる。春城は「下等社会教育論」と題する演説を一八七九年（明治十二）二月に行なっているほか、標題は記されていないが富国策として「人民ノ品行ヲ矯正スル」ことが重要だとする内容の演説の稿本が残されている。

- (10) 一八四七—一八一八。淡路国出身の自由民権運動家。一八八一年（明治十四）静岡の攪眠社社長に迎えられ自由党系の『東海暁鐘新報』を創刊、その後『自由新聞』記者等を経て衆議院議員となる。自由党代議士として活躍し、晩年は松阪に閑居したという。また春城の「政党論」と土居の関係については、山下重一「土居光華と『東海暁鐘新報』」（『国学院大学図書館紀要』三、一九九一年）でも言及されている。解題注(15)拙稿参照。

- (11) Austin, John、一七九〇—一八五九。イギリスの法哲学者。法の本質に関する命題「法は主権者の命令である」は有名。ジャバンナレッジ版『日本大百科全書』参照。

- (12) Woolsey, Theodore Dwight、一八〇一—一八八九。フェノロサの政治学の講義で Woolsey の「Political Science」が教科書として使われたことが知られている。解題注(13)①書参照。

- (13) 以下、各演説会の参加者のうち、これまで触れていない人物について簡単に記しておく。

田中館愛橘（一八五六—一九五二）。陸奥国二戸に生まれ、東京大学理学部に学ぶ。東京帝国大学教授となり、全国規模での地磁気観測をおこなうなど、震災予防にも尽力する一方、ローマ字綴り方を発案し、その普及、発展につとめたことでも知られる。

中原貞三郎（一八五九—一九二七）。周防国生まれ、東京大学卒。土木技術者として陸軍省参謀本部測量課、東京第一土木出張所長などを歴任。

藤田四郎（一八六一—一九三四）。越後に生まれ東京大学を卒業し、外務省参事官、農商務省秘書官等を歴任、貴族院議員となる。

関直彦（一八五七—一九三四）。紀州藩士の子として生まれ、大阪英語学校を経て東京大学を卒業。在学中から『東京日日新聞』（日報社）に寄稿し、卒業後同社に入社、「橘村」の名で論説を担当、のち社長となった。また東京専門学校講師として法学、帝国憲法などを講じた。

有賀長雄（一八六〇—一九二一）。大坂の歌道の家に生まれ、大阪英語学校から進学し東京大学を卒業した。欧州留学からの帰国後、枢密院書記官兼総理秘書官となる。また『国家学』を著わすなど、国法学者としてもその地位を固め、東京専門学校、早稲田大学教授をつとめた。

三崎亀之助（一八五八—一九〇六）。讃岐丸亀の生まれ、大阪英語学校から東京大学に学び、卒業後は外務省御用掛として在米公使館書記官等を歴任する。第一回総選挙で当選、以後第四回まで連続当選、その後貴族院議員となった。

- (14) 一八七三年（明治六）、ロンドン滞在中の馬場辰猪、小野梓らが設けた「日本学生会」が起源となり、帰国した小野が「人間共存の道を講究勸奨する」ことを目的に設立、法律、理財、衛生などの課題について議論を戦わせ、講演会を開催、雑誌『共存雑誌』を刊行した。解題注(16)書参照。

- (15) 進文学舎（進文学社とも）は、讃岐高松藩士であった橋機郎が開いた私塾で、当初は主にドイツ語を教えていたが、東京大学入学を目指す学生のために英語を教えることとなり、橘の息子・槐二郎と交流のあった高田が東京大学在学中ではあったが教鞭を執ることとなり、後には坪内逍遙も教壇に立った。『半峰昔ばなし』（解題注(11)）参照。

- (16) 一八三九—一九〇五、土佐国宿毛に生まれ、明治政府で大蔵少丞などを務めた後、岩崎弥太郎にその能力をかわれ三菱会社に入社し顧問として活躍した。小野梓の妹と義真の弟が結婚している。井上琢智「小野梓を支えた人びと 伊賀陽太郎、馬場辰猪、小野義真」（『早稲田大学史記要』四五、二〇一四年）、同「小野義真と日本鉄道株式会社」（『経済学論究』六三（三）、二〇〇九年）。

- (17) 東洋館書店、一八八五年。東洋館は小野梓が一八八三年に開業し、現在の富山房につながる書店。

- (18) 「内外政事情廃刊ノ顛末」（春城資料 七七二）。

- (19) 岩崎弥太郎（一八三四—一八八五）が、土佐藩が設立した「九十九商会」を譲り受けてはじめたもので、明治前期を代表する政商資本として後の三菱財閥の母体となった。

- (20) 岩崎弥太郎（一八三四—一八八五）。土佐国の地下浪人の家に生まれ、学問で身をたてようと精進し、安積良斎、吉田東洋らに学ぶ。土佐藩の長崎出張所に勤務し、武器弾薬の調達など貿易事業で成果をあげ、維新後は実業界に転身し、藩の事業を継承する形で独立し、さらには発展させ三菱商會を設立、三菱汽船会社と改称し、のちの三菱財閥の基礎を築いた。弟の弥之助（一

八五一—一九〇八）は、兄を援けて創業期の三菱を支えた。

- (21) 一八五四—一九一二。安房藩士の子として生まれ、維新後政府会計局に就職、一八七四年（明治七）三菱に入社した。その後、日本郵船に移り、また東武鉄道の創立にも参加した。

- (22) 一八四七—一九二二。豊後臼杵藩の儒者の家に生まれ、創立初期の三菱に入社、永きにわたって重職をつとめ、岩崎兄弟を支えた。

- (23) 一八八二年（明治十五）、新潟県内の自由党勢力の一つである頸城自由党うち、中央の自由党とは距離を置いて、地方の独立を維持しようとする人々が脱党し、立憲改進黨の政綱に従って同年十二月に結党したもの。室孝次郎（一八三九—一九〇三）を幹事とし、中央の立憲改進黨と連携するようになった。高田新聞社主となった中川源造も黨員の一人である。解題注(28)①永本書参照。

- (24) 一八八一—一九四〇。越後国の士族の家に生まれ、一八八一年（明治十四）に慶應義塾を卒業し、高田新聞創刊に参加した。高田事件では春城とともに有罪となり下獄、出獄してから上京し郵便報知新聞に入社し、矢野文雄を援けた。その後、東京市會議員、衆議院議員を歴任した（日本風土民族協会編刊『越佐傑人録』、一九三九年）。

- (25) 羽田は羽田文蔵（文造）、安孫子は安孫子石太郎と思われ、いずれも春城が新潟学校で学ぶ前に通っていた広業館とともに学んだ人物である。広業館の名簿が春城の筆録（戊辰漫録 二 昭和三年六月下浣起筆）春城資料 四〇四）に貼り込まれており、それによれば春城は一八七〇年（明治三）一月、羽田がその前年、安孫子は春城の一年後に入学している。またこの二人について春城は、「此学校の学生は七、八十名はあつたであらうが、『中略』此等学生の中には諏訪山（今の聖籠）の大野塾（大野耻堂）より転じて来たものが若干あつた。安孫子石太郎、羽田文蔵などがそれで相当の学力があつた、」（一）は原文のママ、「」は引用者による」と述べている。市島春城「豊城星野恒先生」（『高志路』三三三号、一九三七年。のち、市島春城『余生児戯』、富山房、一九三九年に収載。解題注(15)拙稿参照。

- (26) 春城の筆録「回顧録資料 一」（春城資料 七六〇）に、「高田新聞の八千号を祝し高田の父老諸君に告ぐ」と題する春城の一文が貼り込まれている。

- (27) 一八三四—一八八四。越後新発田藩の儒者をつとめた大野恥堂（一八〇七—一八八四）の長男。ジャバンナレッジ版『日本

人名大辞典』参照。

(28) 草稿のうち七一〇章を収めた下巻のみが「獄政論 下」(春城資料! 七五九)として伝わっている(但し、一〇章は後欠)。また、それとは別に乾・坤二冊にまとめられたものが現在東北大学附属図書館に収蔵されているが、これは春城の遠戚にあたる市島成一の名前で同館に寄贈されたもので、寄贈を受けた同大学の木村亀二が『獄政論』として全文を翻刻、刊行している(一九四六年、有斐閣)。なお同書には春城の随筆「獄窓旧夢談」(『随筆春城六種』(早稲田大学出版部、一九二七年)および『回顧録』(中央公論社、一九四一年)からの再録)が附録として収載されている。